



2003年

SORA 4号

晴夜 (4) | 3

柴田 佐知子

どの家も月光の道ありて閉ざす
母いつも浅き眠りや雁のこゑ
大樽を据ゑたる闇も十二月

何事もなきかに囲む牡丹鍋
炉話のうしろより手が伸びてきし
寒満月遺影並べし大藁家
神楽笛山の形に山があり
赤々と鶏冠が揺れて霜の花
雪降るや笑はぬ母は恐ろしき

南国

中田みなみ

タイ七句

朝焼や舟漕ぎ出てパンプ摘む

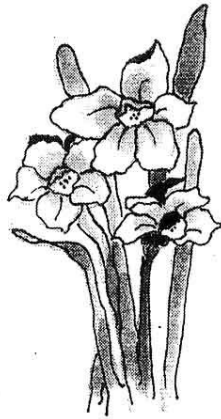
水牛の貌も浮べる水遊び

罎や棒で支へてひらく窓

声のなきメーデー進む王宮へ

岸辺行く得度の列や雲の峰

舞へる指反るだけ反らし夜の短か



椰子騒や月に透けたる魚泳ぎ

バリ島八句

早苗田の隣り稲刈るモア帽子

闘鶏のはじまる田水沸くさなか

勝ち鶏を棕櫚の団扇で扇ぎやる

木洩日の動く腕輪やマンゴー売

井戸端の湿り好めり羽抜鶏

夕焼や野良犬の群焦げ臭し

天井に守宮影繪の始まれり

ガメランや夜も閉ぢゆるき睡蓮花

以前還暦を迎えた頃、津田清子氏の「七十の一日沙羅の花一日」にとっても感動し、心して一日一日を大事に過ごしたいと思ったのは確かだったのに、気が付けばだらだらと大した事もせず、喜寿も既に過ぎ傘寿に近づいてしまった。最近 は初学の頃の師、椎木嶋舎の「生きていく目にはいろいろのみどりかな」が、何かに付けてふとよぎる。今に旅も儘ならなくなったら、目に収めた様々な光景をゆっくり巻き戻そうと思う。

冬怒濤

青山 悠

胸像の多きキャンパス小鳥来る

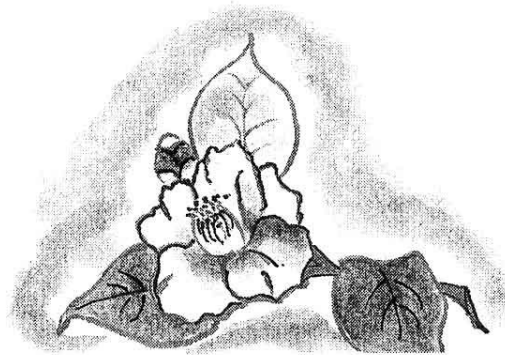
猪除けの煙の中に遍路みち

落人の裔の寸土や冬の靄

つつましき一日の暮るる石路の花

鬼の子の貌出してゐる昼下り

天高し阿蘇の名水家苞に



メドウサの首を離れし蛇穴に

手を打つて呼び戻されし星月夜

太刀魚の真一文字に糶られけり

一湾にこもる霧笛や出航す

巡視船定位置にあり鯛雲

垣低き倭寇の裔や冬怒濤

極月や煤をこぼして梁暗し

屯して引潮を待つ冬鷗

寒晴や海人より太き海女のごゑ

道路拡張に伴い、夫の生家や近隣の親しい人達が立ち退き、気楽に訪ねる家が無くなってしまつて淋しい毎日である。勝樂寺という禅寺の庫裡も跡形もなく解体されてしまった。

この寺には大きな椋と榎木があり、歩道にまで枝をひろげている。春はやわらかい芽立ちの色が美しく夏は大きな緑陰を作り、築地塀に沿つて歩くのはとても楽しい。この度の道路拡張では、線引きぎりぎりのところで伐採をまぬがれた。今は小鳥たちが賑やかに椋の実を啄んでいる。この樹を見上げて豊かな気持ちとなつて戻つてきた。

睡眠薬

秋 千晴

海底に鬼の足跡小鷹舞ふ

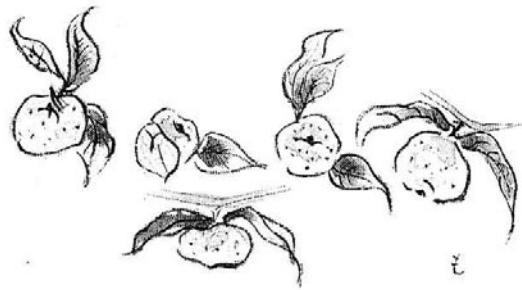
まぢかに見る小馬の貌も長かりし

葉の丈を越えてひらきし蓮の花

睡眠薬に寝かされて厄日かな

爽やかや動きだしたる古時計

大盛りの枝豆の塩片寄りし



戦後、家庭電化製品の発展は目覚しく、
今やスイッチ一つで家事も自由自在である。
私が幼い頃は、電気製品をいち早く
購入して電化生活をするのがゆとりのあ

米よりも粟が多くて日曜日

頬染めし娘の話を聞く良夜かな

貰ひたる柘榴しばらく飾りけり

実柘榴の一粒ごとに友の顔

芒のみ挿されてゐたる闇夜かな

襖絵の虎の座敷に通されし

紋付の歪み正して炉を開く

大寒の地卵の殻硬かりし

る生活であった。

最近テレビコマーシャルで「家を作るなら手間のかかる生活がしたいと思います。」を耳にした。この手間のかかる生活とは今のスイッチポンの生活とは違うと思う。

子供が小学校へ入学した時、年配の先生より雑巾は手縫いにして下さいと言われた。ミシンで縫ったものは固く、手縫いの柔らかさに及ばないというのだ。母親の心が、一針一針にこもっているように自分ながら嬉しかった。

もう子供も社会人となっているが「お母さんの妙り豆腐が好き、芋づるが好き、ひじきが好き、切干大根が好き・・・」と言つて真つ先に食べて持ち帰りもする。時間がかかり、手も荒れるが、家事を楽しみながら手間のかかる生活をしていきたいと思う。

冷たき芒

あさなが 捷

波間より夕日寄りくるヨツトかな

白絹をひろげ大瀧落ちてきし

蠅叩きまだ吊るさるる母郷かな

かなぶんの鋭く頬をかすめけり

やはらかに伸びて冷たき芒なり

挑戦状突きつけてゐる毒茸



菱の実やどうでもいいと云ひだせず

線香の匂ひしみたる蓮の飯

小走りについてゆきたる踊の輪

お向かひの庭師のくれし柘榴の実

持統陵まはる坂道雁渡し

枯菊のまだしぶしぶと燃えてをり

藁塚や天まで煙伸びてをり

すでに意を決してゐたる足袋白し

福耳について歩める初詣

家のすぐそばに御開池おひらきいけという名の池があります。

転居して十一年間、毎日眺め、その土堤で春は土筆を、秋には籠を編むための葛づるや、お月見のすすきを取ることができます。

生物も、蟹・鯉・トンボ・鴨たまには蛇などフツーに見ることができですが、普通には見られないものもいるのです。まぼろしの猿なのです。それは西日を浴びて池を見つめる、もしくは雪の中、池の端にうづくまる老猿でなければなりません。

娘から「見た。」と聞かされて以来、その猿に逢いたくて、私は晴れた日の夕方や積もる程の雪の日には、池を廻らずにはいられないのです。